論　文

雑誌『番紅花』
――一九一四年の尾竹一枝――

Magazine “Saffran”
―― Kazue Otake’ Year 1914 ――

渡邊澄子（大東文化大学名誉教授）

Sumiko WATANABE

本誌の読者で『青鞜』を知らない人はおそらく皆無だろう。また、『青鞜』は平塚らいてうとイコールのように認識されているのではないだろうか。『青鞜』を女性解放運動誌への道筋をつけた尾竹一枝（紅吉）＝富本一枝の名は知られているだろうか。どの『辞典』『事典』にもらいてうは高ランクで扱われ、女性解放運動の基礎を築いた『青鞜』の創刊者と位置づけられ、戦後は平和運動に挺身した我が国の婦人運動の先覚者とされている。一方、一枝について記載のある『辞典』『事典』はほとんど見られない。カノン化されたこの構図は先ず訂正されねばならない。『青鞜』は女性解放を意図して創刊されたのでもなく、らいてうは戦時中、皇国史観や優生思想に立った戦争謳歌の発言をしているばかりか、早々と疎開したことを先見の明と誇り、戦後も疎開地に居続けるつもりだったのを、一枝によって呼び出され、栄光の晩年を持つことが出来たのだ。誤りを繰り返さないためにも真実を知らねばならない。一枝の創刊した文芸演劇雑誌『番紅花（サフラン）』について述べる前に『番紅花』刊行前史として『青鞜』およびらいてうと一枝について一筆書き的に記す。

平塚明（はる）（1886～1971）は後に会計検査院次長になった高級官僚の父の三女として生まれ、当時としては最高の学歴を持つ。すなわち日本女子大学校家政科卒業後、成美女子英語学校に通い、ここに生田長江によって開設された「閨秀文学会」に参加という知識欲旺盛さで稀な女性だっ

た。この会の講師だった森田草平と塩原尾頭峠で「学歴ある男女の心中未遂事件」を起こし、スキャンダル化されたことに怯まぬ明の人物を見込んでのことだろう、長江が女性による女性のための雑誌刊行を熱心に勧めたのだった。雑誌刊行などに興味も関心も無かった明に、その頃、職探しのために平塚家に居候していた姉の女子大での友人の保持研がチャンスとばかり、私が手伝うからと明に強く迫ったことによる心ならずの発刊（1911・9）だった。資金は明の婚資から母が出してくれた百円によるが、その後も何度か僅かずつ補填してもらったらしい。世間に認知され活動が活発化したきっかけは一枝の無邪気で正直な言行による怪我の功名が大きい。一九一五年一月、らいてうは、らいてうの個人誌意識で、伊藤野枝の申し出を受け入れて経営と編集を譲っている。同人たちに相談した上での決定ではなかったようだ。

一方尾竹一枝（1893～1966）は日本画家の父と、格式を重んずる富山藩の高級武士を出自とする母の長女として富山市で生まれた。祖父は新潟で紺屋業の傍ら絵師として土地の娘たちに押絵を教えたりして親しまれていたが派手な女出入りで産を失い、義務教育制度が実施されても授業料が払えず、子どもたちは小学校教育も受けていない。彼等は苦節の幼少期を送っている。一枝の父で長男の熊太郎（国一・越堂）は自由民権運動家として板垣退助の自由党で活動し、「越堂」の雅号は伊藤博文によってつけられたものという。一七歳時から『絵入り新潟新聞』の挿絵を描いていたがその後、富山に移住し、追ってきた二弟と共に『富山日報』の連載ものの挿絵を描き、また売薬行商人の配りもの絵を描くようになり、売薬絵師の中軸は三兄弟が担ったが、間もなく弟の竹坡と国観が東京に移った為に「富山版画」は越堂の独擅場となり、今なお、富山県の売薬史と相俟って「越堂」の名は生き続けている。越堂には発明癖があって、脳裏に閃くと本業そっちのけで寝食を忘れて熱中するので母は苦労したらしい。規模壮大な企画は全て挫折し、成功例は上野公園にある現在の東京美術館だけだったようだ。三兄弟中、最も高名なのは雅号竹坡の染吉だが、彼は四歳の頃から神童と言われ、その弟の雅号国観の亀吉も『小国民』主催の全国児童画で一等をとり、三兄弟が描いた『小国民』の挿絵は鏑木清方を感心させたという。とりわけ竹坡は帝展の無鑑査までなり、以前の目黒の雅叙園には天井も襖も全部竹坡の絵で囲まれた豪奢な竹坡の間があった。フロントの天井絵も竹坡だった。長廊下には巨大な国観の絵が飾られていた。横山大観と双璧をなす高みに登った「尾竹三兄弟」は東京美術学校（現・芸大）出の派によって後年憂き目をみることになるが、大観の師でもある岡倉天心が、学の無いのが惜しいと言ったという。

一枝は、「尾竹家に官僚と軍人はいない」を誇りとする気風の家に、父や叔父の苦節の過去を知ることもなくおおらかに育ち、夕陽丘女学校（第一期生）では校内一の人気者でエピソードに富む。父は一枝を「閨秀画家」にするつもりで下校後の日課にその日の新聞の挿絵をはじめ、日本画の基本らしい「前賢故実」「信貴山縁起」「福富草紙」などの模写を命じていたが、一枝は日本画を好きになれず、腹痛とか怪我とか嘘をついてサボり、隠れて読書に熱中する少女時代だったと書いている。東京に行けば本当に生きたい道がみつかると東京幻想に駆られ、叔父竹坡の助言で美術学校に進む条件で東京遊学を果たしたものの、現芸大の東京美術学校はまだ女子に門戸を閉ざしていたので、日本画専科だけの女子美術学校に寮生となって入学した。だが、授業は古くさくてうんざりで、写生用に渡された薩摩芋や栗などを火鉢（当時の暖房）で焼いて食べてしまったり、

林檎や梨は半分食べて如何に立体感を出せるかと試したり、いいかげんに過ごしていたが、一枝が竹坡の姪と知った日本画主任の川端玉章から特別扱いされて我慢出来なくなった時、洋画科が新設され転科の許しを願う手紙を父に出したその返事もこないうちに舎監と喧嘩をして退学してしまい、竹坡の家の家事手伝いの傍ら絵の勉強をするようになる。この家には内弟子が何人かいて、蕗谷虹児もその一人だった。『青鞜』との関わりはこの家の叔母宛にきた『青鞜』購読勧誘状を、庭掃除をしていて配達夫から受け取った偶然に始まる。その辺りは『青鞜の女・尾竹紅吉伝』（２００１・３，不二出版）を参照されたい。東京での唯一の友人、著名画家小林清親の娘で仏英和女学校専攻科に在学中だった哥津の紹介でらいてうに会い、たちまち虜になってしまう。一枝が絵を描く人と知って表紙絵を描くように言われて舞い上がる。『白樺』に載った南薫造の「私信往復」を読んだことで、製作欲を満たす方向が決まらない苦悩を抱えている藝術家の存在を知る。名前は明示されていないが大和、安堵村、法隆寺が故郷と知り、武者小路にでも訊いたのだろうか、富本憲吉に会いに行く。この時描いた「太陽と壺」は第二巻第四号（１９１２・４）の表紙をかざっているが、憲吉の手は入っていない。初対面のこの時、興奮したのは憲吉だった。三年間のヨーロッパ中心に世界各地を巡り近代を体験して帰った故郷の陋習囲繞の現実に阻喪していたそこに垢抜けて天真爛漫なかつ美感覚の鋭い紅吉が現れたのだ。憲吉は魅せられ長文のラブレターと読める手紙の矢を放つが、らいてうに夢中の紅吉には通じない。

その頃、一枝一家は大阪に居住していたこともあって大阪で公演中の「人形の家」観劇評を送るようにとのらいてうからの手紙を手にすると、書店に走って購入した岩野泡鳴訳の『人形の家』を徹夜して読み、感動する。らいてうの指示にはなかったが開演前の岩野泡鳴と松井須磨子に滞在中の旅館に訪ねてインタビューをしている。泡鳴の須磨子溺愛ぶりが何気ない筆致で描かれる。須磨子の演技に興奮しながら、らいてうに指示されてはいなかったが観客から感想を聞いている。夫や子まで残して家を出るなんて、とんでもないこと、というのが大方の感想だったことに、日本の女性はあれじゃダメだ、「人形の家」が訴えているのは、女性は自身を高めて男性と対等の思慮、判断力を持たなければ真の結婚は得られぬということではないか、と述べている。ここには直覚的フェミニズムが見られる。一九一二年紅吉一九歳の時である。以後、須磨子と親友として交流するようになる。

この年の四月、当時は代表的画会だった巽画会展が上野竹ノ台陳列館で開催された第十二回巽画会展に出品していた紅吉の「陶器」が金賞なしの三等賞銅牌を受賞し、「天才少女画家出現」と新聞に大きく報じられたのだ。この画展では父の越堂は褒状一等で娘より下位だった。越堂が『多津美』に弟二人が審査員で、身内に点をいれないのは不利になって不公平と書いているがもっともである。好きではない日本画の初めて描いた絵が、出品総数四百十一点中、十三番目での受賞だった。東京府知事の選定による鏑木清方、山田敬中、今村紫紅、安田靭彦、上村松園ほかに竹坡・国観も入る十七名による審査で、審査員は作者の名の伏せられた作品に点をつけ、その合計点でランクが決まる規則になっている。一枝が出品していることを知っている竹坡と国観はその絵に点を入れていない。家族は東京下根岸に転居していた。巽画会の機関誌『多津美』には、大阪の富

豪住友吉左衛門が令嬢のために学習院女子部の友人を別邸に招いた宴に一枝を招き揮毫まで求めたなどと、尾竹三兄弟と一枝についての記事が毎号のように載っている。

紅吉の受賞と、ズーデルマンの「故郷」にマグダの妹役で出演した林千歳の成功の祝いを兼ねたミーティングが紅吉の家で開かれた。一九一二年五月十三日のことである。会は盛り上がり泊まり込みになった。この夜、一枝にとっては生涯忘れられぬ体験を持ったのだ。らいてうとの「同性の恋」である。紅吉は舞い上がった。隠すことのできない紅吉は早速書いた。ふた月先の八月号にらいてうも堂々と書いている。一枝は後に「私は自分の情熱で溺れ死にさうであつた。圧倒されて、苦しすぎて、泪まであふれ」（「痛恨の民」）た、と。らいてうに夢中の紅吉に「同性の恋」を仕掛けたのはらいてうだった。「同性の恋」で「光輝と、秘密と、驚愕」に襲われた紅吉は、らいてうの為に力になりたい一心から、青鞜社の財政に役立ちたいとレストラン兼バー「メイゾン鴻の巣」に広告を貰いに行ったのだ。一枝には男性特別視がない。当時は男女交際御法度の時代だったが一枝は意に介さず無邪気にパンの会、『三田文学』『白樺』の人たちと交流していてその誰かに連れて行ってもらった店である。店主が作ってくれたカクテルに酔いしれたのだった。当時は灯りはまだランプで食器類は瀬戸物だった時代に、電気の光に煌めくガラスの細長い器に注がれた五色の酒の美しさへの感動を隠しておけないのが一枝である。飲んではいなかったことを付記しておこう。「鴻の巣」の広告は七、八号に載っている。折も折、物心両面で『青鞜』を援助してくれていた竹坡に、女性の解放を目指す雑誌なら、暗闇で働かねばならぬ女性の存在を知っておく必要があるだろうと言われ、連絡のついたらいてうと中野初と三人で竹坡の馴染みの吉原でも格式の高い妓楼「大文字楼」に竹坡のお膳立てで上がり、お茶の水高女卒という栄山という花魁とお寿司を食べながら話し、隣室に一晩泊まったのだった。一枝に差別視は皆無なので浅草で白首とおしゃべりしてもいたらしい。誰が吹聴したのか、このことが尾ひれをつけて「赤や青の酒をのむ新しい女」「新しい女、男女同権を主張して吉原妓楼に遊興す」「白首と別懇な紅吉子」とジャーナリズムは競って書き立てた。青鞜社は女徳を汚す不良集団と決めつけられて女学校は生徒に読むことを禁じた。社員たちは紅吉を責めた。

一枝に軽度の肺疾患がみつかり、国木田独歩終焉の地の茅ヶ崎の南湖園に入院した。この病院は日本女子大の校医の高田畊安医師による独特の結核治療法で有名だった。ついでに挟むが、一枝入院から七十年も経て訪ねて見たら「太陽の郷」という高齢者の介護施設になっていた。紅吉の入院に付き添う形でらいてうが近くに部屋を借りて移ってきたので編輯室が移転した趣になった。らいてうが紅吉の部屋にいたそこへ見舞いを兼ねて編輯打ち合わせに来た東雲堂の西村陽吉が見知らぬ若い男を連れていた。途中で偶然に出会った画学生が評判のらいてうと紅吉に会いたがったからしい。非常識ではないか。だが、らいてうと画学生が顔を合わせた瞬間の反応に敏感な紅吉は戦慄した。時経ずにやってきた画学生・奥村博（後博史）をらいてうが自分の部屋に泊めたのだ。紅吉の悲歎に保持研が、後に伊藤野枝が「あの時の平塚さんは本当にひどかった」と書いているが、紅吉にとっては残酷この上なしの仕打ちといえるだろう。らいてう自身が「紅吉を自分の世界の中なるものにしやうとした私の抱擁と

接吻がいかに烈しかつたか、私は知らぬ」などと「同性の恋」と何度も書いてきていたのに、二人が事実婚に入ると、あの日のことを「同性の恋」なんかではなかった、それが証拠に奥村との現実がある、と平然と書いていて卑怯だ。ついでに先走って言えば、博史は画家として大成しなかったことでらいてうは経済的にも苦労したが、終生、らいてうを敬愛し続けた一枝によってどれほど扶けられたかしれないのに、一枝の死に際しての悼辞は情のこもらぬそっけないものだった。

退院後、新しい表紙絵を持って来るまで丸窓の部屋の敷居を跨ぐなとらいてうに言われ、いいものを描いて認められたい思いから近代の息吹に接したくて再度奈良へ。憲吉は歓喜した。この時の表紙絵「アダムとイブ」には憲吉の手が入っていると、憲吉記念館の山本氏は言う。第三巻七号から十一号まで五号にわたって表紙に使われている。「新しい女」がジャーナリズムを賑わすようになると社員の冷たい目が紅吉を刺すようになり、耐えられず紅吉は退社を決意する。第二巻十一号（1912・11）には退社の弁とも言うべき「群衆のなかに交つてから」と十四連からなる詩「冷たき魔物」が載り、最後の編輯として「編輯室より」も書いている。どれも悲痛な思いのあふれ出た紅吉像が正直にでていて感動を呼ぶ。世間の悪評の元凶ともいえる紅吉が去っても青鞜社攻撃は止まず、此処で初めて社員達は目覚め、意志的、積極的に行動するようになった。らいてうが攻撃に出た「自分は新しい女である」（1913・1,『中央公論』）は歴史的発言と言える。

非難の視線に辛さを抱えながら一枝はどんな経緯からか生田長江の家の長江が書斎にしていた一番好い部屋を与えられて長逗留し、第十三回巽画会展出品作を描いていた。出品総数五六五点で一等金賞なし二等銀賞二名に越堂の「楓」が受賞している。一枝の六曲屏風一双「枇杷の実」は一ランク下がったが褒状一等を受賞していて続けての受賞である。隠されていた名が明かされて「新しい女」の一枝の二年連続受賞に画界は沸いた。『多津美』は、画展史上例のない総見が行われ、生田長江始め女優や新聞記者たちに坪内逍遥が妻子連れで参加して韻松亭から繰り出して参観、讃美の声が上がって上野の山は賑わったなどと記している。この絵はやっと二〇歳になったばかりで画歴も浅いのに、審査員の山田敬中が百五十円、保間素堂の二百円、伊藤深水の三十七円より高額の三百円という破格値で福島於菟吉が買ったとある。この頃、雑誌創刊を企画していたらしいことを『多津美』が報じている。『青鞜』退社を余儀なくされた悔しさからだろう、後に「『青鞜』であんまり叱られたので、それならこっちも、といった気がまえだった」（「『青鞜』社のころ」、『世界』1956・3）と語っている。『番紅花』発刊は『枇杷の実』の三百円を原資とした二〇歳の女性の自力による刊行なのだ。『青鞜』が平塚家からの百円だったこと、『女人芸術』が長谷川時雨の事実婚者の売れっ子作家三上於菟吉が出資者だったことに比べて見事の一語に尽きる。

『番紅花』は〈純藝術雑誌〉として創刊され華やかに輝いたが、花火のように呆気なく八月号までの全六号で自然廃刊された女性の手になる雑誌である。「大正デモクラシー」の時期（一九一一年から三一年にかけて）には二一四種の女性雑誌が創刊されていて、そのうち女性の手による雑誌は三三

種という（『大正期の女性雑誌』近代女性文化史研究会、大空社、1996・8、新装普及版、2016・2）。二一四種のなかに『番紅花』の誌名はでてくるが女性の手になる雑誌としては無視されている。詳論されている他の雑誌と比べて遜色ないにも拘わらず。表紙絵を依頼された富本憲吉にとっては三度目の正直となり、『番紅花』刊行期間は恋の深化過程ともなって結婚に至ってしまった為の廃刊である。憲吉は人ぞ知る重要無形文化財保持者（人芸国宝）、文化勲章受章の世界的陶芸家だが、それほどの高みに登り詰めたのは、憲吉も絶対の信頼を置いていた一枝の鋭く厳しい美感覚・鑑賞眼によるところが大きい。この物語は別稿に譲る。

雑誌『番紅花』は一九一四年三月一日創刊号発刊。誌名は松井須磨子の楽屋での打ち合わせ時にきまった。月刊。菊版。編輯所は一枝の部屋で東京市下谷区下根岸八三番地。発行は東雲堂書店。創刊号は二二九頁。平均一七〇頁。定価三〇銭。ちなみに『番紅花』より薄い『青鞜』創刊号は一三四頁だが二五銭プラス郵税一銭五厘だった。巻末の広告は創刊号二四頁、二号は二六頁とどの巻も多い。一枝の人気によるだろう。創刊号、第二号の表紙絵「壺」、裏絵「女の顔」は富本憲吉。創刊号の扉絵・カットは小林徳三郎、二号以後のサフランを図案化したカットは恩地孝四郎。三号以後はぐんと華やかになるが憲吉の自画自彫の表紙絵「人魚のよろこびと花をまつ蒲公英の葉」、扉絵は「歌ひかつ昇りゆく雲雀と咲かぬタンポポ」。タンポポは陽の出で花を開くのだ。それまでは花弁を閉じて寝ているという。早起きして実見したらほんとにそうだった。表紙絵の彫りは一枝も手伝って血を流したりしている。一枝を中心とした正式な同人とも言えぬ当初のメンバーは神近市子・小笠原貞子・小林哥津・原信子・松井須磨子六人だったが、須磨子が「復活」の稽古で編集会議に参加する暇が無くなって八木麗（うら）と入れ替わっている。メンバーは次第に増えている。執筆者は以上のメンバーのほか森林太郎（鷗外）、武者小路実篤、蘭五三子、八木さわ子（麗の妹）、菅原和子、阿部次郎、青山（後の山川）菊栄、伊達虫子（岡田八千代）、尾竹ふくみ（一枝の妹）、佐藤春夫、田村とし（俊子）、與謝野晶子、浅井三ツ井（一枝の妹）、小山内薫、松田松葉、小沢愛圀と多彩である。内容は小説・戯曲・詩・短歌・随筆・評論・翻訳と全般に亘るが同人・執筆者の顔ぶれが語るように、演劇面に力が入れられていて演劇誌の要素を併せ持ち、演劇史の資料的効用も備えている。舞台や役者や作者などの写真も散りばめられている贅沢な雑誌で、『青鞜』と『女人芸術』の橋渡し的性格を持ち、『白樺』にも通うユニークで楽しい雑誌だ。この雑誌刊行が画家への道を閉ざしてしまったことになったが。

帝展無鑑査の叔父竹坡はじめ日本画壇を代表する日本画家「尾竹三兄弟」を父・叔父に持つ一枝として一九歳時に既に画家としての評判を得ていたものの、少女時代から日本画は好きになれず文筆の道を夢見ていたのだから、意気は上がっていただろう。編輯過程、同人たちの動静は「編輯室より」が生き生きと伝えているのみならず、この欄は興味のつきない読み所である。創刊号の目次が示すが内容は以後に期待感を抱かせる顔ぶれである。トップは森林太郎の「サフラン」。『番紅花』創刊を祝っての題材だろう。鷗外のこの雑誌への肩入れについて触れておきたい。なぜ漱石でなく鷗外だったのか。読書家の一枝は森茂子の『スバル』発表の「波瀾」を読んで関心を抱いたのだろうか。一枝による「編輯室より」と

「鷗外日記」を合わせ読むと経過が分かる。雑誌創刊に際して一枝は二月四日、大胆にも未知の鷗外に面会を申し込んでいる。その日のうちに（当時の郵便事情は凄い）明日待っていると陸軍省の彼の部屋への地図まで添えて返事が来た。五日、神近市子と一緒に行き、雑誌創刊の技術面での知識の教示と寄稿をお願いする。「鷗外日記」には神近が無視されている。神近無視というより一枝の魅力的な個性に好意を抱き、印象が深かったのだろう。十三日に「サフラン」が送られ、十四日に「海外通信」が送られている。伝染病研究所移管など公務多忙の時期なのに、鷗外は最後まで協力している。サフランは十月頃薄紫色の六弁花を開き芳香があって鑑賞用だが、漢方薬としても使われる。富本憲吉記念館の裏庭に群がり咲いていたのを見た。鷗外文学にこの「サフラン」はどう位置づけられているのだろうか。エッセイ的小品である。子どもの頃サフランに興味を持って父に訊くと薬箪笥の抽斗から出して見せてくれたのは「干物」で父も生の花は見たことがなかったようだ、その後たまたま売っていたサフランを見た。去年の十二月、花屋の店先で見つけ球根を二つ買って帰ったが水もやらずに忘れていたのが今年青々と叢がって出ていて生命力の強さに驚かされた、という話だが、結語は「これまでサフランはサフランの生存をしてゐた。己は己の生存をしてゐた。これからも、サフランはサフランの生存をして行くであらう。己は己の生存をして行くであらう」である。丁度この頃博文館から原稿依頼があり、若山甲蔵著『安井息軒先生』を読んでいたことから息軒の妻「佐代」を主人公にした「安井夫人」を書くことになる。鷗外研究者は佐代を模範的良妻賢妻と位置づけているようだが、鷗外研究に素人の私は鷗外文学における「歴史離れ」とそれまで描いてきた女性像とは違って自我をもった女性像造型の始まりの作とみたい（拙著『女々しい漱石、雄々しい鷗外』世界思想社、1996・1、参照）。鷗外はさらに翻訳を二号に「豪光」、五号に「忘れて来たシルクハット（戯曲）」を寄稿しているばかりか第五号を除く全巻に「海外通信」を「O・P・Q」署名で送ってくれている。これは抜群に面白く女性解放を願う者にとって有効であり啓蒙的である。世界各地の傑出した先進的女性や、その運動、ファッションまでが紹介されているのだ。「安井夫人」以後の女性像造型に一枝と『番紅花』が果たした役割の大きさが見られる。

創刊号には、武者小路実篤の『美術に就ての雑感』が寄せられている。「真の美術品から吾人の受ける感じは大別して」「感能からくるものと、直接に精神からくるのと」二つあるとして、それを詳論している。原信子は「プチニーの歌劇」についてと「今日の歌劇」（感想）の二編を、松井須磨子は「復活劇の梗概」として、トルストイの小説をフランスのアンリバテイユが芝居に直したので、序幕はネフリドフとカチウシヤが戯に落ちる場面から始まるとして粗筋を述べている。カチュウシャの歌は当時日本の津々浦々まで人気を博したらしく、秋田の在の荒川鉱山の長屋生まれの作家松田解子から、学校の帰り、みんなで大声で歌いながら帰ったものだった、と聞いた。

一枝が須磨子と親友関係になった経緯は既に述べた。須磨子は第四号に「最近の不平」を発表している。抱月の後を追って自裁（1919・1・6）したが一冊の随筆集を残している。亡くなってみると桜の小花を散らした華やかなカバーが哀しさを誘う『牡丹刷毛』（1914・7、新潮社）である。抱月の「序に代へて」には「男性的力張の素描に女性的婉柔の陰をつけたのが女史の芸術であ」り、「舞台の上に漲らす熱力と其の鮮明にし

て強烈な表情とは、今の日本の女性が達し得る限界を越えてゐる」の一節がある。ここには肖像と多くの舞台写真がおさめられていて楽しいが十七本の随筆のなかでも「最近の不平」と、これと同工の「感想」は注目される。「最近の不平」はOさん宛の手紙文形式だがOさんは尾竹一枝だろう。ここには「同じ人間で有りながら、男には許されて女には許されないと言ふのはをかしいぢや有りませんか」、「『女の癖に』といふ女子軽蔑の思想からぬけ切つて居ない」からで、「女には自分等男よりも遙に多い負擔をしよわせるのが当然のやうに考へて」いる、それでも女は「だまつてゐなくちやならないものでせうか」、「私はすべて私のする事を男として考へて貰ひたいと思ひます。男と同じ自由を與へ同じ尊敬を払つて貰いたい」と述べていて感動され、直覚的フェミニズムをみることができる。

神近市は毎号小説を載せているが、創刊号の長文の「序の幕」は「上」「下」構成だが冗長で、「青鞜」社員であることが知れて津田塾の学長から青鞜退社を命じられ、卒業後、青森の高等女学校に飛ばされる経緯が描かれている。登場人物はすべてアルファベット表記なのでらいてうと紅吉以外は想像が届かず創作であるにしても分かりにくい。『青鞜』への「迫害や嘲笑を通じて今後幾百千萬と我等の後につゞいて生れて来るこの国の女達の真の自覚の日が来るのでは有るまいか、そして男達が教育も趣味も境遇も同じくすることの出来る異性を得ることの出来る黄金時代が近よるのでは有るまいか」には先見的認識がみられる。表題に「わかれ来しすべての人々にさゝぐ」の付言があって、青森に発つ前に際してのものと読める。第六号のセルマ、ラガールーフの「私生児の母」の翻訳とその解説といえる「セルマ・ラガールーフ女史に就いて」以外はどれも冗長な小説だが、なかでも面白いのは第四巻に発表の「N氏のマニユスクリプト」である。赴任先の女学校の校長からS社（青鞜社）との関係を詰問され、新聞記事になるのを怖れて転任か退職か選べと問い詰められた事が書かれている。H、Kは平塚らいてうと紅吉であろう。青鞜社員であることがそれほど大問題になる当時の社会の現実を知る資料的価値において有効だ。免職になって東京に戻り、一枝の紹介で東京日日新聞に入社、敏腕女性記者として活躍し、大杉栄との間に日蔭茶屋事件を起こすが、戦後は女性解放・人権擁護運動に献身し、社会党から立候補して当選、四期つとめ、売春防止法成立に貢献した政治家神近の前史として興味深い。

創刊号に一枝は詩「私の命」と「夜の葡萄樹の蔭に」を表題として「あはれかなし」と「悲しきうたひ手」を添えた三詩と、手紙文体の「自分の生活」を掲載している。「私の命」に謳われる「太陽」は長女の名に「陽」とつけたように一枝にとって成長したい意欲を表す象徴語だ。手紙文体文は冗漫で「夏樹」から「俊ちやん」宛てだが夏樹と俊ちゃんがだれか不明だ。らいてうとの「同性の恋」が踏みにじられて愛についてあれこれ考えたのだろう。愛について多面的に描いているもののあまり面白くない、「編輯室より」の方が遥に興味深く資料的価値も高い。創刊号では「S・Y」「K・O」が「海外消息」を載せている。鷗外の「海外通信」とは領域を異にした絵画・演劇・音楽に関する海外ニュースが多いが、ネタ元は何処だろう。S・Yは八木さわで、K・Oは尾竹一枝。一枝はリツスラー、原信子はマリーの署名も使っている。妹の福美（署名は「ふくみ」）は創刊号に短歌十六首二号四月号に小説「さくらの花」、五月号に小説「なげき」を発表している。筋らしい筋もないが文才を感じさせる。

一枝が二作目で褒状一等をとった「枇杷の実」は生田長江の家に長逗留して描いた絵であることは述べたが、この時、家からの使いで頻繁に訪れた福美に、長江の間借り人兼書生だった佐藤春夫が、生涯の傑作と言われる叙情詩「泉と少女」「情痴録秘抄」『ためいき』や『詩文半生記』に描かれた「プラトニックラブによりて心身甚だしく病めり。慢性の不眠に罹」ったほどの恋をし、結婚まで求めた相手が福美だが、懐手して歩くような文学者に娘はやれぬと越堂に反対され、福美は画家の安宅安五郎と結婚した。四号以後に名の出ないのはそのため。当時の一般的文学者観はそのようなものだった。ちなみに福美の長女美穂は鷗外の末子の類と結婚している。福美作の前者は、桜を見る度に思い出されるという、小間使いだったおしほと商売の見習いにきていた朝治との恋が家制度に阻まれて引き剥がされるという話で、後者は親友のおふみさんには結婚したい人がいたのに家長の命令で嫌な人と結婚させられることになって自裁する話で女が自由に生きられなかった理不尽な時代をしっとりとした筆致で淡々と描きながら、だが、批判を込めて女性の人権無視を告発したものになっている。春夫のラブが影響しているのだろうか。そのまた妹の三ツ井は福美と交替したかのように四号に詩「西班牙物語ルイザ姫様の詩」を六号に「果物うりの若者のうたと」「白い鳩の死」二編の詩を載せている。三ツ井の人柄そのままの優しさの溢れた心地よい詩だ。三ツ井には妻を失った後の有島武郎に愛された物語がある。残されているものだけでも有島の三ツ井宛書簡は五十九通に及ぶ。一方で、有島の弟・佐藤隆三宅で開催された『生まれ出る悩み』のモデルの漁師画家木田金次郎展で受付と雑務を手伝い、木田の絵を一枚買ったことから木田と親しくなったが、結局は、父に従って日本画家の野口謙次郎と結婚した。謙次郎は東京美術学校（現芸大）卒で、帝展に毎回入選し、特選も得ている風景画を得意とする画家だが、日本画に洋画的色彩技法をとりいれた最初の画家でもあった。三ツ井は何冊もの女性、少女雑誌の挿絵や口絵ばかりか、小説も書いていて、その才を伸ばすようにと有島は勧めている。

小林哥津は創刊号に戯曲「春のすゑ」、三号に小説「苦労」、六号に小説「浮世」を発表しているが、下町娘の粋な風情に哥津の性格が反映されている。「浮世」は友人への手紙形式だが冒頭の、「久しく」ではなく東京言葉の発音で「しさしく御ぶさた」に主人公をイメージさせる手際はなかなかだ。水商売のふさを客の孝三郎が見初めて妻にしたが姑にいびられて戻され、夫には新しい妻が与えられたのを諾々の夫の情けなさを友達に愚痴っている趣のもの。「お亭主があつても、ないやうなみじめなおかみさんなら、ふつふついやに候」、「そこらの味がわかつてきたのが、子供から大人になつた相違かと思ひ候」がよく効いている。

小笠原貞は創刊号に「さふらんの香」、二号に「姉と妹」の小説を寄せている。前者は結婚して遠隔地に行った文子が出産のために帰って来た時の話でもっぱら母と「嫂」との仲良い交流が細叙されている。文子は持病もちだろうか出産前から弱々しいが出産後も赤子の傍若無人ぶりに母親になった文子の身体が追いつけない。母や「嫂」が可愛くてたまらぬらしくあやすのが辛い。一日一日目に見えて成長する赤子の世話が満足に出来ぬ自分が情けない、発作が起きたり熱が出たりの文子の健康を心配する母が、医者から渡される薬で無くサフランを飲むようにと言う。サフランが薬だったなんて知らなかった文子は母が煎じてくれたサフランをどうぞ効きますようにと祈る思いで香をかいだ、という平板な作品。父も

「嫂」の夫である兄も、子が産まれたのに文子の夫も姿を現さないのは不自然。後者は上下構成で上は姉の多鶴子が主人公。早くに両親を亡くし、妹の親代わりになって必死に働いてきて三十になろうとしているが浮いた話の一つもないこれまでだが、官庁から洋行の話が出る。それは夢でもあり目的でもあった。そこに縁談が飛び込んできた。二人の子持ちの軍人の後妻だが大変いい人と知って迷うが洋行をとる。大勢の人が見送りに来てくれていて別れを惜しむ。妹の美代子とは、彼女に恋人が出来たことが許せず、口をきくことも無い日が続いていた。銅鑼がなり、見送り人は下船するようにと放送されてみんなが降りていったところに美代子が別れの挨拶に来る。胸が一杯になりながら恋愛なんかでなく勉強するようにと涙ながらに別れた。船が出てひとりになると、妹への態度は正しかったんだろうか、と考え込まされる。下は美代子が主人公。姉から受けた恩義は感謝しきれない、だが、ひたすら勉強せよで恋人との交際を絶たされた姉はもういない。彼と一緒にどんな苦しみにも耐えて立派に生きて行こうと決意すると嬉しさが溢れ、「美代子の頬は美しく上気して血の色が上って居た」で終わる。テーマが掴みきれない。

八木麗とさわの姉妹は麗が三号に出ていないだけで全号に顔をみせている。創刊号には「二人の歌」として短歌を寄せているが、さわに創刊を祝ってか、「さふらんは薄紫の色もよくなよなよしくも咲ける花かな」がある。二号はさわが詩「影のかげ」、麗は「『ピエールとジャン』を読みて」を。仏文学者で幾つもの世界の名作の翻訳をしているさわの詩は先入観によるのだろうがフランスの香がする。麗のモーパッサン『ピエールとジャン』評論は本格的で見事。読みを自分の言葉で書いている。すべてに優れていて両親からもこの上なく愛されている弟のジャンが母の姦通罪による子だったことを知ったピエールの苦悩と、それを知られた母の煩悶。だがジャンの父であるマレシャールとの愛は純真で、「彼女の心の自由は如何なる権力もこれを奪ふことは出来」ない。「自ら愧づることはない」と思いながら罪と認めないわけいはいかず、虚偽の生活をおくってきたことに苦悶悔恨せざるを得ない。夫は妻と亡友との間の子とは知らず、残酷にも欺かれたまま平和に墓場へと辿りつける「至極幸福な人」と位置づけている。論じてみたい読みである。さわの三号掲載の「断章」は口ずさみたくなる詩である。四号にはさわが「夕」「海」「夢」「舟」「指」の短詩五編の「きれ〴〵」、麗が小説「別れの手紙」を発表。この小説はくどいがおもしろい。進学のために来た東京の伯父の家で会った東北大生に恋して、彼を命とまで思い詰めてしまう。伯父の娘の喜美子が婚約者として決められていて、彼はそれを承諾している。私には彼に喜美子はふさわしくないと思っている。そこに私の結婚話が来る。家のため親のためと服従を強いる人たちの説得に負けて一旦は承諾してしまうが、恥辱、罪悪感から自己の尊厳を守るために拒否する。私は全てを失い、一人ぽっちになって、八丈島で先生として生きる道を選ぶ。「私は全く新しい私になつて、新しい生活に入り」ます、という意志的女性を描いている。五号にさわの長詩「甘き呪」、六号にこれも長い八連からなる詩「リラの香」を寄せ、麗は六号に聖書の教理に生きる外国女性を主人公にした小説「C夫人の或る朝」を発表している。この号で廃刊になったのが惜しい期待される人だ。この号には與謝野晶子が詩「蝉」を、長谷川時雨は戯曲「月に住む人」を。「月に住む人」は仙人と自称する美女嫦娥に恋する少年、不死の霊薬を盗んで消え去る嫦娥。筋が入り組んでいてよくわからない。六号掲載の伊達虫子（岡田八千代）の「或る夫人に」は交流の途絶えて

いたらしい友人への見舞いを、「髪」と「写真（上下）」の二話に託した珍しい手法の作。筋らしい筋も無い。最後に「つゞく」とあるが七号は出ず、中途半端になり残念な作。五号は演劇が中心の観の巻。小山内薫の「レッシング座で見た芝居」、松居松葉の「女優片々草」、小澤愛圀の「人形芝居について」さらに原信子の「オツフエンバフハ」が続く。写真が八葉もあって楽しい。どれもテーマに真向かって書かれていて、内容も私などには未知の分野なので興味深いが紹介する紙幅が無い。

紙幅を失ったが、どうしても省筆できないのは青山菊栄の翻訳である。コロレンコの「マカールの夢」（二号）と「盲楽師」（四、五、六号）の面白さは抜群だが、注目されるのはカーペンターの「中性論」（三、四、五号）で「同性論」はこの時代画期的である。この問題は、別稿に譲るが一枝の晩年の苦悩に繋がる問題として惹起するとは想像だにしなかったのに、奇しくも二一歳時に思考の種を与えられていたのだ。今から一一〇年近く前にこのような問題を提起していたとは驚きだ。紙幅の許される限りほんの少し引用紹介しておこう。「あらゆる人間は男女の両要素を有つてゐる。たゞ常態（ノーマル）の人の場合には」「一方の要素が他の要素よりも大なる発達を遂げてゐる」ということである。中性男性には「優雅な情緒的素質」があり、中性的女性には「活動的、放胆にして実直」の傾向がある。「異性間の恋愛には『種族の蕃殖』なる特殊の任務」があるが「同性の恋には社会的の勇烈な事業と精神的子孫の生殖―即ち吾等及社会に変化を来す哲学的思想及理想を生む独特の職分」がある、等々蘊蓄に飛んだ論が展開されている。中性や同性愛者を非倫理的で穢らわしいなどの視点は微塵も無く、むしろ相手を思いやれる関係と評価している。その例証を私達は幾つも知っている。宮本百合子と湯浅芳子については湯浅から私は同性愛だったと直に聞いている。百合子が湯浅から得たものは大きい。矢田津世子の文学がコントから芸術的完成度の高い純文学作家への成長には大谷藤子との同性愛があり、吉屋信子と門馬千代も、「どちらかがどちらかを犠牲にすることの無い関係」だった。一九一四年という時代を考えるとカーペンターにも、訳者の青山菊栄にも、採りあげた『番紅花』にも感心させられる。

『番紅花』は、資金から女性の手になる雑誌だが、執筆者に男女の隔てなく男性にも開放し、文学に限らず演劇界の現実のみならず、世界各国の女性解放状況まで視野広くとりこんでいて、他にみられぬ差別のない広い視野にたった雑誌として高く評価されていいだろう。最終巻になってしまった六号（八月号）の「編輯室より」の筆者は八木麗だが皆が「九月号には好いものを書きたいと思つてゐる。そして好い雑誌をつくりたいと思つてゐる。此号に載る筈だつた尾竹さんの『人形買ふまでの恋』も次号まで待つていたゞきたい」とあって、突然の廃刊だったことが示されている。富本憲吉と一枝の恋の高まりによる。一枝の責任は重いのに自覚が無い。驚嘆されるのは、一八九三年生まれということは、明治二六年生まれと言うことであり、『番紅花』創刊の一九一四年は一枝二〇歳の大正三年ということであるが、一枝の発表文には擱筆日がすべて西暦で記されていることの驚きである。元号は「君主」の時間に民衆を従わせる制度で中国に倣って「大化」に始まる前近代の遺物だ。一枝はそれを知っての西暦使用だったのだろうか。富本憲吉との結婚で一枝に新しい人生が始まるが、見事なのはただの一度も憲吉を「主人」としていないことである。一枝に一貫していたのは「自己を生きたい」「生きたい生き方を生きたい」で、その為の葛藤が以後の一枝の「生」そのものになる。